

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
1 資料収集・保管活動	資料の計画的な収集・整理・保管ができていますか	自然史系資料収集	中期的資料収集計画(別紙1)との整合性がとれているか	設定した収集計画に沿った活動が行えた。	資料収集方針に基づいた収集が行えた	・年報 p.50-51 ・別紙1	B	・昨年度に引き続き、タイプ標本を含む多数の標本の「寄贈」を受け入れることができた。 ・概ね、設定した収集計画に沿った活動が実施できたが、学芸員による「採集」は、活発には実施できなかった。	A	・自然史系資料の収集に関しては、具体的な収集方針が提示され、また119点ものホロタイプの寄贈を受けていることは、高く評価できる。 ・自然史系資料の登録は、分野により設定した目標値が異なることなどのため、達成率に違いがあるが、概ね順調に進められている。
		自然史系資料登録	デジタルデータベース化状況<設定目標値(別紙2)>	12,440点	1,638点	・年報 p.50 ・別紙2	B	・設定した目標登録点数の120%以上を達成した分野があった一方、60%程度にとどまった分野もあった。	B	・歴史系資料の収集は、折尾駅の旧駅舎の部材などの地域の歴史に関わる貴重な資料の収集ができており、資料収集方針に基づいて行われている。 ・歴史系資料のデータベース化は停滞気味とのことだが、1,000点に達していることは評価できる。
		歴史系資料収集	資料収集方針(別紙3)に基づいた収集・保存ができていますか	資料収集方針に基づいて収集が行えた	資料収集方針に基づいた収集が行えた	・年報 p.52 ・別紙3	B	・折尾駅の旧駅舎の部材や東谷郷土資料館の収蔵資料について、レスキューを行って、保存につなげることができた。 ・数の少ない地元の中世文書を購入することができた。 ・全体として、資料収集方針に基づく資料収集をおこなうことができたが、収集や保管の制度改革、データベース化などについては停滞気味であった。	B	・総合的には、自然史系・歴史系ともに収集方針に従った計画的な資料収集ができていますが、登録業務に関しては分野による達成率に大きな違いが存在するなどの改善点があったため、Bと評価した。
		歴史系資料登録	登録点数<受入手続終了点数>	1,000点	35点	・年報 p.52	B	・前年度に比べて大幅増を実現することができた。ただし登録が間に合わなかった資料群もほかにあり、1年間の実績としては最大限とはいえなかった。	B	
		<総合>						B	・概ね設定した目標どおりの定量的・定性的活動ができたが、自然史系資料の「採集」による収集や、歴史系資料の「登録」など、さらなる努力が必要な活動もあった。	B

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
2 調査研究活動	戦略的な調査研究を実施し、博物館の調査研究機能を高めることができるか	研究業績	外部資金応募数・採択数 *令和3年度申請・採否決定分 <採否未定分については申請数からも除外>	23件申請 11件採択	23件申請 5件採択	・年報 p.59, 63, 65 ・別紙4	A	・学術振興会の研究費助成のみならず、様々な外部研究費助成に積極的に申請できた。 ・代表者および分担者としての申請をあわせると、学術振興会への申請課題の約30%、他への申請課題の100%が採択された。(学術振興会によると、令和3年度の主な研究種目における採択率は27.9%)	A	・外部資金獲得に向け積極的な応募ができており、採択数も前年度の約2倍に達するなど、高く評価できる。 ・外部資金による継続研究には、コロナ禍のため計画どおりに実施できなかったものがあったようだが、課題数も前年度より増加していることは評価できる。
			外部資金獲得による継続実施研究課題数 *令和3年度開始分を含む	24件	20件	・年報 p.59, 63, 65 ・別紙4	B	・外部資金による実施研究課題数は前年度より増加し、研究活動が活性化すると判断できた。 ・一方、コロナ禍のため、多くの研究は計画どおりに実施することができなかった。	A	・論文出版数は前年度よりやや減少しているが、国際誌への発表もあり、また一連の研究に対する学会賞受賞もあったことは評価できる。 ・総合的には、調査研究活動は順調に行っているが、より積極的な研究活動が期待できるため、Bと評価した。
			自然史系 学術論文等出版数 学会発表数	出版24本 発表22件	出版41本 発表19件	・年報 p.60-62	B	・国際誌を含む審査制(査読付)雑誌に19本の論文を発表したが、発表総数は前年度の約60%にとどまった。 ・リモートでの学会開催が常態化したこともあり、学会発表数は前年度よりやや増加した。	B	
			歴史系 学術論文等出版数 学会発表数	出版5本 発表0件	出版7本 発表1件	・年報 p.64	C	・出版数は5本だが、学術論文(審査あり)は1本にとどまった。学会発表はゼロだった。 ・全体として、各自の研究の進展を図り、積極的に学術論文の執筆と投稿、学会発表などを行うことが求められる。この点について改善が大いに必要である。	C	
			普及書等執筆数	21本	21本	・年報 p.62, 64	B	・自然史分野や歴史分野の普及につながる普及書の執筆が、前年度と同様に実施できた。	B	
	<総合>						B	・前年度同様の積極的な研究外部資金への申請を行うとともに、多くの課題が採択されるなど、博物館の調査研究機能を維持できた。 ・学会発表や審査制の論文発表など、さらなる努力が必要な活動があった。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	
3 展示活動	自然史、歴史に関する市民の興味関心を高めるとともに質の高い魅力ある展示ができているか	総入館者数	総入館者数	241,736人	137,736人	・年報p.10	A	・総入館数は、コロナ禍の影響がより強かった前年度比約1.7倍に増加した。	A	・総入館数は、入館制限実施中だが、前年度比約1.7倍に達したことは評価できる。	
		特別展	有料特別展 総観覧者数	有料特別展観覧者数(夏:70,000人)	57,731人	24,421人	・年報p.18	B	・夏季特別展期間中に、新型コロナウイルス感染症拡大のため常設展を閉鎖したこともあり、観覧者数は目標値の82%であった。	B	・総合的には、コロナ禍のため目標とした観覧者数に達しなかった展示会もあったが、画像や模型を活用するなど、全体的に工夫がこらされ、概ね良いと思われるのでBと評価した。
			夏特別展 「THEモンスター」	特別展のテーマをわかりやすく伝えるための工夫が実施できた。			・年報p.18	A	・会場を展示会のテーマである「攻撃」「防御」に分け、それぞれのテーマに沿った標本を展示するなど、テーマがより伝わるようにした。 ・生物の攻撃と防御に係る「機能」をわかりやすく伝えるため、分類群にとられない構造展示を中心とした展示手法を採用した。 ・密防止や換気対策のため、鳥状展示やの移動壁を極力避けるなどの会場構成を実施した。	A	
			秋特別展「鉄の都のものがたり」	釜石市との連携により、近代製鉄の歴史と「鉄の都」としての共通性や関係性を明示することができた。			・年報p.19-20	C	・釜石(橋野鉄鉱山)から八幡製鐵所に至る近代製鉄の発展の歴史について、釜石市所在また八幡製鐵所所蔵の貴重な歴史資料をおして鑑賞、世界遺産としての価値とストーリーを明示した。 ・類似した内容であった平成30年度冬の特別展「世界遺産のまち・北九州と明治日本の産業革命遺産」と同様の料金設定であったが、全体の観覧者数は前回の22,099人を大きく下回った。 ・コロナ禍の影響も大きいと思うが、展示内容や方法について、さらなる改善や工夫が必要であった。	B	
			冬特別展「博物館のお正月2022」	毎年の干支展示を拡大し、自然史・歴史両分野相乗りで、様々な視点や内容の展示を行うことができた。			・年報p.21	B	・毎年の干支展示を発展させ、自然史と歴史の両分野を持つ総合博物館としての特長を生かして、正月や干支に関する展示を行なった。干支の虎の刺繍標本や絵画、吉祥の図柄の着物や絵画など、正月ならではの展示を行った。 ・内容的にはさらなる改善・充実の余地はあるが、館蔵品の活用により、総合博物館としての可能性を考える機会となるなど、今後につながる展示会となった。	B	
		企画展	北九州・産業都市の軌跡	北九州ミュージアムパーク創造事業の一環として、3会場を結んで、北九州市の足跡を示すことができた。ただし途中で公開中止となった。			・年報p.16-17	B	・北九州市の産業都市から環境未来都市への歩み、SDGs未来都市への展望について、博物館、環境ミュージアム、地元の中央区商店街をつないで明示した。 ・展示解説シート(3会場合わせて29枚)を作成し、展示解説に開く小学6年生を対象とするイベントや店舗でのギャラリートークなど、3会場をつなぐ「ミュージアムパーク創造」を意図したイベントを行った。 ・しかし32日間の会期のうち13日間で公開を中止せざるを得ず、効果を検証することはできなかった。	B	
			歴史企画展・テーマ展など(近現代史関連)	世界文化遺産や「世界の記憶」などを中心に、北九州の近現代史に関する様々な展示を行った。			・年報p.24	B	・世界遺産ビジターセンターの一時的移設をはじめ、北九州市の近現代史関連、館蔵の歴史資料や美術品の紹介など、様々な内容の企画展・テーマ展を開催した。 ・本年度の特記事項は次のとおりである。 ①山本作兵衛コレクションの「世界の記憶」登録10周年記念として、田川市石炭歴史博物館との交流キャラバン展を開催し、山本作兵衛の炭坑記録画原画(「世界の記憶」登録)のうち10点を当館で初めて、それに合わせて、当館の最大の炭坑記録画を同時に公開したこと。 ②最古の絹糸織仏画(県指定)について、科学調査や復元実験の成果を交えて、掘り下げて紹介したこと。 ③北九州の中世～近世史をたどれるような内容・方法で、館蔵の古文書資料を公開したこと。さらに松前藩主宛の徳川將軍朱印状を初公開し、幕府と藩の関係や松前藩～北海道の独自の歴史的な位置について紹介したこと。 ④昔の道具に関する展示について、今回は約100年前と約50年前に大別して、当時の子どもの1日の生活を復元する形で紹介する工夫を行ったこと。さらに学校給食の食糧を食品サンプルを活用して明示したこと。 ・陳列や展示解説の方法などについてはまだ改善や工夫の余地がある。	B	
			歴史企画展「蓮一極楽浄土の花」	福聚寺が所蔵し、当館が保管する絹糸織仏画3点を中心に、蓮と仏教や北九州との関わりについて紹介した。			・年報p.25				
			歴史企画展「北九州の古文書」	当館が所蔵する中世～近世の北九州ゆかりの人物の書状と松前藩主に宛てた徳川將軍の朱印状を紹介した。			・年報p.26-27				
			歴史企画展「わくわくタイムトラベル いまむかし」	小学3年社会科の学習支援として、道具や暮らしの移り変わりを紹介した。			・年報p.28-29				
常設展(中世)の展示更新	展示資料の保護や展示内容の充実の観点・刷新のため、まず中世史の展示を2度にわたって更新した。				・年報p.30						
その他展示(短期展示など)	研究成果の紹介や、自然現象の理解深化につながる展示などを行った。			・年報p.31-35							
<総合>						B	・実物のみならず画像や模型などを活用することで、自然史や歴史に関する興味を喚起し、理解を深めるための工夫を施した展示を実施することができた。 ・より多くの市民により興味を持ってもらえる展示となるよう、解説手法などにさらなる工夫が必要である。	B			

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120～80%、C: 80～40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
4 教育普及活動	博物館がセカンドスクールとして、子どもたちの来館機会を創出し、理科・社会科への学習意欲を持たせる仕組みづくりを進めているか	セカンドスクール事業(MT主務)	学校団体誘致活動回数<100社>	85社	96社	・年報p.39	B	・前年度実績よりは数社減っているが、目標値の85%は達していた。	B	・団体行動を伴う教育活動などは、感染拡大防止において、とくに制約がかかるものであるにもかかわらず、講座開講数が前年の1.7倍、参加者同5.9倍に増加していることは評価できる。 ・評価指標によっては高い値にならなかったため、総合的にはBと評価したが、コロナが終息すれば大いに期待できる。
			社会見学・修学旅行等 入館団体数 入館者数	379団体 20,258人	312団体 14,108人	・年報p.39	A	・昨年度実績と比較して、団体数で121%、入館者数で143%と回復傾向にあった。	A	
			体験プログラム等 実施回数 参加者数	55回 2,711人	78回 3,305人	・年報p.40	B	・教育委員会主催の環境アクティブラーニングなど、体験プログラムを伴う来館がほぼキャンセルとなったこともあり、参加者数は前年度の82%であった。	B	
	市民の知的ニーズに応じた効果的な生涯学習が実施できているか	教育普及講座類(学芸員主務)	館主催普及講座 開講数 参加者数	19講座 681名	11講座 122人	・年報p.40-41	A	・新型コロナウイルス感染症拡大前と比較すると、まだ実績は劣るが、人数制限を行いながらも、講座を開催できた。 ・前年度実績と比較しても、開講数は1.7倍、参加者数は5.9倍であった。	A	
			特別展開連普及講座等 実施回数 参加者数	0回 0人	3回 176人	なし	—	・新型コロナウイルス感染症拡大に伴う、様々な制約が大きいため、評価対象外とした。	—	
<総合>							B	・新型コロナウイルス感染症拡大による入館制限や、体験プログラムの人数制限など、様々な制約のある中で、各項目において回復基調にあった。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
5 広報・情報発信活動	多様な広報媒体を活用し、特別展をはじめ博物館活動の情報発信に努めているか	特別展等博物館活動 広報・報道件数	広報・報道(市政記者クラブ)に情報提供した件数	8件	17件	・年報p.12	C	・新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、ナイトミュージアムなどのマスコミに情報提供すべきイベントを中止した結果、市政記者クラブへの情報提供が少なかった。	C	・記者クラブへの情報提供が少なかったのは、コロナ禍のためナイトミュージアムなどのイベントができなかったためであり、致し方ないことであるとする。 ・広報や報道で取り上げられた件数はメディアにより前年度比が異なるものの、全体的に概ね良いと評価した。
			広報・報道で取り上げられた件数	・新聞 延べ14誌 324件 ・雑誌等 延べ30誌 37件 ・テレビ 延べ16社 110件 ・ラジオ 延べ3社 20件 ・インターネット 延べ39社 39件	・新聞 延べ12誌 253件 ・雑誌等 延べ19誌 30件 ・テレビ 延べ11社 118件 ・ラジオ 延べ4社 111件 ・インターネット 延べ20社 21件	・年報p.12-13	B	・マスコミなどに取り上げられた件数は、テレビ(前年度90%)およびラジオ(同18%)以外は、120~190%であった。	B	・総合的には、新たな企画の開始など、多彩な情報発信が活発に行われているのでAと評価した。
			ホームページアクセス数	694,901件	397,155件	・年報p.13	A	・各種イベントや特別展などに関する情報を随時掲載したほか、SNSでの情報発信件数も倍増したため、アクセス数(前年度比1.7倍)も伸びている。	A	
			SNS(Twitter, Facebook)での情報発信数	772件	385件	・年報p.13	A	・特別展開催期間中にはほぼ毎日SNS投稿を行った。 ・新たな企画として「今日は何の日」をテーマに自然史・歴史にまつわる「〇〇の日」の情報を発信するなど、館の魅力発信に努めた。 ・ツイッターのフォロワーも年度で667人増加した。	A	
	<総合>						A	・新型コロナウイルス感染症の影響は受けつつも、SNSなどを積極的に活用し情報発信ができた。	A	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	
6 市民との協働	博物館ボランティア(シーダー)の参画により市民との協働による取り組みが進められているか	博物館ボランティア(シーダー)の活動支援	シーダー登録者数(50人)	53名	53人	・年報p.47	B	追加募集などはしていないため、人数の増減はないが、目標値を超えている。	B	・博物館ボランティア(シーダー)の意向を汲んだ活動方針や計画の作成などの活動再開に向けた取り組みは着実に進められている。 ・自然史友の会のオンライン研究発表会や歴史友の会の講演会の補助など、友の会との活動を継続できたことも評価できる。	
			活動再開に向けた計画策定状況等			・館内会議(再開に向けて) ・意向調査等の実施	説明会を実施	・年報p.47	A	・館内で担当者会議を複数回もち、協議したり、各ボランティアグループのリーダーから意見聴取を行ったりするなど、活動再開に向けての動きを加速させた。 ・ボランティアへの意向調査を実施するなど、意見を十分に聞き取って活動再開へ向けた動きを進めた。	A
	友の会の活動を支援するなど、友の会と連携できているか	「自然史友の会」の活動支援	活動再開に向けた計画策定状況等			友の会役員とコロナ禍での活動に係る協議や、友の会主催活動の再開に向けた補助を実施	友の会役員とコロナ禍での活動に係る協議を実施	・年報p.48	B	・オンラインでの研究発表会実施や、市民向け講座「植物細密画を描いてみよう！」再開の支援を行った。 ・新型コロナウイルス感染症収束後の活動再開や拡大を見越した事業計画策定などに関しては、十分な支援が行えなかった。	B
			冊子類発行数	2冊	2冊	・年報p.48	B	・原稿のチェックや校正など、冊子発行に向けた支援を行った。 ・新型コロナウイルス感染症拡大の影響により会員からの投稿数が少なかったこともあるが、冊子の発行は2冊にとどまった。	B		
			講演会 実施回数 参加者数	7回 493名	7回 304人	・年報p.49	B	・当初は11回実施を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により4回は中止となった。 ・会員限定・定員80名、必要な対策を行って前年度と同回数実施し、参加者人数が増加した。	B		
			史跡めぐり 実施回数 参加者数	1回 30名	1回 26人	・年報p.49	B	・当初は4回実施を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により3回が中止となり、1回の実施にとどまった。 ・回数、参加者数は前年度とほぼ同数であった。	B		
			歴史友の会だよりの発行回数	3回	3回	・年報p.49	B	・当初計画のとおり、3回発行した。会長や学芸員の寄稿や会員の投稿により、会員相互の情報交換に寄与した。 ・そのほか、歴史課全学芸員が寄稿して、「歴史友の会通信」を1回発行し、博物館や学芸員の研究活動を友の会会員に知っていただく機会を設けた。	B		
	<総合>						B	・ボランティアおよび両友の会の活動は、前年度同様、コロナ禍の影響を多大に受けたため、館として協力・支援できる事柄が限られた。 ・自然史友の会活動の再開や活性化に係る協議などは、十分に支援できなかった。	B		

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40%とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
7 社会貢献	学術研究機関として社会に貢献し、シンクタンク機能を果たすことができているか	学術研究機関として、大学等外部機関への支援ができているか	委員等就任 人数 件数	17人 107件	17人 83件	・年報p. 42-46	A	・ほとんどの学芸員が委員に就任しており、委員会への参加件数も前年度の約1.3倍に増加するなど、行政機関や学術団体への依頼に対応できた。	A	・行政機関や学術団体の委員などへの就任、専門分野に関する講演などの実施、研究や教育用資料の貸出は積極的に行えており、前年度と同程度の社会貢献ができている。 ・コロナ禍でも外部機関からのさまざまな依頼に対応し、真摯に社会貢献ができているのでAと評価した。
			外部機関の依頼による講演などの対応回数	69件	49件	・年報p. 42	A	・学校(小学校～大学)や市民団体からの依頼に応え、前年度の約1.2倍の講義や体験プログラムを実施するなど、学校教育・社会教育に貢献できた。	A	
		資料貸出	資料貸出者(団体)数 貸出点数	77人・団体 433点	85人・団体 397点	・年報p. 55-58	B	・前年度と同程度(約1.1倍)の資料を貸し出すなど、学術研究や教育普及活動に係る資料の提供依頼に対応した。	B	
	<総合>						A	・外部機関からの講義や資料借用依頼などに対し、前年度同様あるいはそれ以上の対応ができおり、引き続き博物館のシンクタンク機能を果たすことができた。	A	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120～80%、C: 80～40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標	実績	前年度実績	参考資料等	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	
8 その他	適切な新型コロナウイルス感染症対策や、それを踏まえた新たな取り組みが行えたか	チケット購入までの事項	新型コロナウイルス感染症の拡大状況に則した安全・安心な来館やチケット購入体制が維持されているか	入館時の検温や手指消毒を徹底、時間制ウェブ予約システムを継続した。	入館時の検温や手指消毒を徹底、時間制ウェブ予約システムを導入	・年報p.14-15	A	・昨年度に引き続き、事前Web予約制を採るなど感染予防対策を行うとともに、HPでの周知・館入口での注意喚起(消毒・検温など)に努めた。 ・繁忙期の混雑時には券売機付近が密にならないよう、臨時にオープンギャラリーやガイド館にベルトパーテーションを設置するなどの工夫を施した。	A	・チケット購入から展示観覧に至るまで、新型コロナウイルスに対する適切な感染予防対策に努めるとともに、状況に応じてハンズオン展示を再開するなど、臨機応変な対応ができていたため、Aと評価した。	
		展示観覧に係る事項	新型コロナウイルス感染症の拡大状況に則した安全・安心な展示観賞環境が維持されているか	「三密」防止のための館内での周知を継続するとともに、感染状況や社会状況を鑑みてハンズオン展示の再開を行った。	「三密」防止のための館内での周知	・年報p.14-15	A	・新型コロナウイルス感染症の感染状況の分析結果に基づきハンズオン展示を再開するなど、来館者に安全・安心でより楽しんでいただける展示環境の維持および向上が行えた。	A		
	<総合>							A	・前年度からの継続に加え、当該年度における新型コロナウイルス感染症の感染状況の分析に基づいた新たな取り組みが実施できた。	A	
	北九州ミュージアムパーク創造事業によって新たな取り組みが行えたか	東田地区を北九州市の新たな賑わいづくりの拠点とするための事業の実施状況	博物館を軸に、東田地区を中心とする関係施設の連携を強化するための事業を実施できたか	・春と秋の2回、連携企画展を開催し、それに合わせて合同のイベントを実施した。	/		・年報 p.16-17, p.19-20, p.38	B	・春の「北九州・産業都市の軌跡」では、北九州市の現在に至る歩みと未来への展望について、博物館・環境ミュージアム・地元の中央区商店街をつないで明示した。合わせて、小学校6年生を対象として、3会場をつなぐガイドツアーを含む「子ども記者」イベントを開催した。 ・秋の「鉄の都のものがたり」は釜石市との初の交流展で、釜石から八幡に至る近代製鉄の発展の歴史や両都市に共通する暮らしや文化を明示した。 ・コロナ禍により、春は途中で開催中止となった。春・秋ともに賑わいづくりにどれくらいつながったのか、評価できる状況には至らなかった。	B	・環境ミュージアムや地元商店街をつないだ春の展示会や釜石市と連携した秋の展示会の実施など、全体的に良いが、アーカイブ用の画像撮影数は計画の約6割という点を考慮してBと評価した。
		当館を東田地区さらには北九州市の中核館としての魅力向上を目指した事業の実施状況	デジタルアーカイブの構築・公開や展示環境改善、常設展改修計画策定が実施できたか	収蔵資料等のデジタルアーカイブ化や展示照明の改善を進めるとともに、楽しみながら学習してもらえる可能性を秘めた展示改修計画を策定した。			・年報p.38	B	・アーカイブ用の画像撮影数(294点)は計画の約6割にとどまったが、構築したデータベース点数(7,078点)は目標を1割近く上回った。 ・展示資料の視認性や安全性を向上させるため、覗き型ケースを新たに3台導入した。 ・新たな資料の展示や最新技術を用いた解説手法などを組み込んだ学習・集客機能の向上に資する改修計画が立案できたが、一部に具体的性にやや欠けるコーナーも存在した。	B	
<総合>							B	・資料などのアーカイブ化と公開は、当初計画どおりには実施できなかった。 ・展示関連什器の改善や常設展の改修計画は、ほぼ予定どおり実施することができた。	B		

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。



北九州市立自然史・歴史博物館 自己評価および外部評価【総括】

令和3年度

評価項目	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	意見
1 資料収集・保管活動	B	・概ね設定した目標どおりの定量的・定性的活動ができたが、自然史系資料の「採集」による収集や、歴史系資料の「登録」など、さらなる努力が必要な活動もあった。	B	・自然史系資料の収集に関しては、具体的な収集方針が提示され、また119点ものホロタイプの寄贈を受けていることは、高く評価できる。 ・自然史系資料の登録は、分野による達成率に違いがあるが、概ね順調に進められている。 ・歴史系資料の収集は、資料収集方針に基づいて行われている。 ・歴史系資料のデータベース化は停滞気味とのことだが、1,000点に達していることは評価できる。 ・総合的には、自然史系・歴史系ともに収集方針に従った計画的な資料収集ができていますが、登録業務に関しては分野による達成率に大きな違いが存在するなどの改善すべき点があったため、Bと評価した。	
2 調査研究活動	B	・前年度同様の積極的な研究外部資金への申請を行うとともに、多くの課題が採択されるなど、博物館の調査研究機能を維持できた。 ・学会発表や審査制の論文発表など、さらなる努力が必要な活動があった。	B	・外部資金獲得に向け積極的な応募ができており、数採択数も多く、高く評価できる。 ・外部資金による継続研究には、コロナ禍のため計画どおりに実施できなかったものがあつたようだが、課題数も前年度より増加していることは評価できる。 ・論文出版数は前年度よりやや減少しているが、国際誌への発表もあり、また一連の研究に対する学会賞受賞もあつたことは評価できる。 ・総合的には、調査研究活動は順調に行えているが、より積極的な研究活動が期待できるため、Bと評価した。	
3 展示活動	B	・実物のみならず画像や模型などを活用することで、自然史や歴史に関する興味を喚起し、理解を深めるための工夫を施した展示を実施することができた。 ・より多くの市民により興味を持ってもらえる展示となるよう、解説手法などにさらなる工夫が必要である。	B	・総入館数は、入館制限実施中だが、前年度比約1.7倍に達したことは評価できる。 ・夏の特別展は明解な展示で、冬の特別展は自然史と歴史の両分野の総合性が発揮できていたことも評価できる。 ・総合的には、コロナ禍のため目標とした観覧者数に達しなかった展示会もあつたが、画像や模型を活用するなど、全体的に工夫がこらされ、概ね良いと思われるのでBと評価した。	・地元の商店街とのつながり等を明示したことで、来館者は北九州市の変遷を具体として捉えやすかつたのではないかと考える。具体については、子どもたちが訪れた際に興味関心をひくものであるため、可能なら区ごとのつながりなどを大きなマップと年表などで示していただけるとありがたい。
4 教育普及活動	B	・コロナによる入館制限や、体験プログラムの人数制限など、様々な制約のある中で、各項目において回復基調にあつた。	B	・団体行動を伴う教育活動などは、感染拡大防止において、とくに制約がかかるものであるにもかかわらず、講座開講数が前年の1.7倍、参加者同5.9倍に増加していることは評価できる。 ・評価指標によっては高い値にならなかつたので、総合的にはBと評価したが、コロナが終息すれば大いに期待できる。	・近年はリカレント教育や大人の学びへのニーズが高まっており、先端的・専門的で高度の知識を持つ学芸員が携わることで講座はさらに充実するものと考えられ、博物館のプレゼンスをより高めることにつながると考える。 ・小中学校が利用した際の感想文やアンケート結果などがあれば教えていただきたい。
5 広報・情報発信活動	A	・新型コロナウイルス感染症の影響は受けつつも、SNSなどを積極的に活用し情報発信ができた。	A	・記者クラブへの情報提供が少なかつたのは、コロナ禍のためナイトミュージアムなどのイベントができなかつたためであり、致し方ないことであると考え。 ・広報や報道で取り上げられた件数はメディアにより前年度比が異なるものの、全体的に概ね良いと評価した。 ・総合的には、新たな企画の開始など、多彩な情報発信が活発に行われているのでAと評価した。	・ホームページへのアクセス数やSNSでの情報発信数の大幅な増加は、博物館が目指す24時間ミュージアム・ネット化構想を加速するものとして高く評価できる。 ・SNSやホームページなど、インターネットを利用した情報発信が好調であることはコロナ禍でもあることから評価できる。ただ、「ターゲット層を設定し、それに合わせた情報発信」ということになると、ホームページを小学生以下用とそれ以上用に分ける等、工夫が必要では。また、リピーター率の調査等のデータも公開していただきたい。
6 市民との協働	B	・ボランティアおよび両友の会の活動は、前年度同様、コロナ禍の影響を多大に受けたため、館として協力・支援できる事柄が限られた。 ・自然史友の会活動の再開や活性化に係る協議などは、十分に支援できなかった。	B	・博物館ボランティア(シスター)の意向を汲んだ活動方針や計画の作成などの活動再開に向けた取り組みは着実に進められている。 ・自然史友の会のオンライン研究発表会や歴史友の会の講演会の補助など、友の会との活動を継続できたことも評価できる。 ・総合的には、新型コロナウイルス感染拡大が影響を及ぼしたなか、市民との協働に健闘をされており、Bと評価した。	・オンライン研究発表会や講演会の開催補助など、友の会と博物館がしっかりと協力しながら進められているので、継続して取り組んでいただきたい。

7 社会貢献	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部機関からの講義や資料借用依頼などに対し、前年度同様あるいはそれ以上の対応ができており、引き続き博物館のシンクタンク機能を果たすことができた。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>行政機関や学術団体の委員などへの就任、専門分野に関する講演などの実施、研究や教育用資料の貸出は積極的に行っており、前年度と同程度の社会貢献ができています。</li> <li>コロナ禍でも外部機関からのさまざまな依頼に対応し、真摯に社会貢献ができていますのでAと評価した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校などにおいて学習を進めていくうえで、博物館は重要な学習環境となっているので、オンラインなども含め、学習支援を継続して取り組んでいきたい。</li> </ul>
8 その他 ① 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策 ② 北九州ミュージアムパーク創造事業	① A ② B	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 前年度からの継続に加え、当該年度における新型コロナウイルス感染症の感染状況の分析に基づいた新たな取り組みが実施できた。</li> <li>② 資料等のアーカイブ化と公開は、当初計画どおりには実施できなかった。</li> <li>・展示関連什器の改善や常設展の改修計画策定は、ほぼ予定どおり実施することができた。</li> </ul>	① A ② B	<ul style="list-style-type: none"> <li>① チケット購入から展示観覧に至るまで、新型コロナウイルスに対する適切な感染予防対策に努めるとともに、状況に応じてハンズオン展示を再開するなど、臨機応変な対応ができていたため、Aと評価した。</li> <li>② 環境ミュージアムや地元商店街をつないだ春の展示会や釜石市と連携した秋の展示会の実施など、全体的に良いが、アーカイブ用の画像撮影数は計画の約6割という点を考慮してBと評価した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「スペースLABO」のオープンにともなう今後の新たな取組に期待したい。</li> </ul>
総合評価	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料の収集・保管活動や、外部資金を用いた研究・展示環境整備は進展している。</li> <li>・博物館のシンクタンク機能も引き続き発揮できている。</li> <li>・新型コロナウイルス感染症の影響により、教育普及活動など、活動を縮小せざるを得ない、また再開できない事業もあった。</li> <li>・研究成果の公開や展示手法の開発など、さらなる努力が必要な活動が存在している。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ感染症の対策を行いながら、実施可能な研究、データベースの構築、イベント、外部からの要請への対応を着実に進める等、努力の足跡が見てとれる。博物館活動を総合的に見ると概ね良かったためB評価としたが、コロナ終息後にむけ、色々な領域での実力がため込まれている最中にあると思われ、次の展開が期待される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナ感染拡大防止の高いレベルでの対応や、引き続き数多くの社会貢献や教育普及活動をされてきて、近年のその努力は博物館の存在確立のためにも大きな実績になったと考えられる。</li> <li>・一方、現在の外部評価体系は、評価基準が難しく評価が厳しくなりがちで項目がある。従って、目標実現に向けた努力が評価できる仕組みを検討する必要があるものとする。</li> <li>・また、館員の業務時間や様々な業務のウェイトの再確認や、調査研究活動か展示活動のどちらかの重点化、そして調査研究活動と展示活動の資料収集・保管活動へのリンクの強化などをおし、新型コロナウイルス感染症収束後の新しい博物館活動の展開も検討していきたい。</li> <li>・これまで達成してきた職員のワークライフバランスの確保を引き続き配慮するとともに、メンタルヘルスにも十分に留意した業務計画の策定が必要であるとする。</li> </ul>

評価基準 A：大変良い、B：概ね良い、C：やや不十分、D：不十分